
「^{グアンシ}關係」を追って見えるもの——刊行に際して

編集部

中国人の行動様式を見るうえで、「^{グアンシ}關係」が一つのキーワードとなっていることは周知のとおりである。それを考察する論考を仮に「中国人論」と言うならば、それは往々にして(中国の)外からの視点が加わり論じられるものであった。例えば、アーサー・スミスによる中国人の「面子」や、費孝通が水の波紋に喩えた中国人の人間關係にみられる「差序格局」(格差と序列の構造*)、許烺光(F・L・K・シュー)の「情境中心」などは中国人論の古典として知られる。一九七〇年代後半から西洋の社会学理論が中国に入り、様々な社会現象に対する考察はその枠組みの下でなされ、普遍性と特殊性を見出そうとする努力が行われてきた。一方、それに限界を感じ「本土研究」に立脚した論考も学术界に一石を投じる存在として知られて久しい。

本特集のテーマ「^{グアンシ}人間關係」は、「人間關係」に当たる中国語の「^{グアンシ}人間關係」をベースにしている。もともと、「^{グアンシ}人間關係」という語は「^{グアンシ}interposenai」の訳で、一九七〇

年の『現代漢語詞典』第三版(商務印書館)に初めて登場したこと、まだそれほど古くないと言える。それは、中国では「^{グアンシ}關係」と言えば、普通「人間關係」のことを指していることに起因しているのかもしれない。一方、「^{グアンシ}關係」(relationship)は必ずしも中国的な「^{グアンシ}關係」に似つくりくるような用語にはなっていないことも指摘されている。中国式「^{グアンシ}關係」について論じる際には、中国語のピンイン「^{グアンシ}guanxi」にするか、同じ漢字を持つ日本語では「^{グアンシ}關係」と中国語読みのルビを付ける、これは研究者の間で一般的になっているようだ。

本特集冒頭の「講演」には、「^{グアンシ}關係」の「本土研究」を代表する一人である翟学偉氏と、「^{グアンシ}關係」「圈子」を本土研究に取り込んだマネジメント研究に取り組む気鋭の研究者羅家徳氏の両氏による講演を掲載している。翟氏の講演では「^{グアンシ}關係」研究の四つの重要な思想が紹介され、それにより「^{グアンシ}關係」研究の流れが見えてくると同時に、氏自身の研究スタンスも見えて取れる。一方、羅氏は海外での研究生活

が長いゆえに西洋の社会学理論を多く取り入れながら、大量の一次資料を用いて、人的ネットワーク(「圈子」)の経済活動に与える影響を検証する。両氏それぞれの人文学的社会学と経済学的社会学の視座からのアプローチは対照的であるが、本土研究は中国的「関係」の解明と解釈だけでなく、西洋の社会学への影響も大きいという共通の思考を垣間見ることができる。

一方、日本では中国人の行動モデルについて、その嚆矢ともいえる研究に園田茂人氏の『中国人の心理と行動』が挙げられる。中国人の行動モデルを「関係主義」と命名した氏にこの特集のために論説を寄せていただいた。氏の「中国的「関係主義」再論」は、ここ三十年来の「関係」概念をめぐる論考を概観したうえ、大規模な調査による日中韓台の比較と分析を通して対中ビジネスにおける中国の「関係主義」を浮き彫りにしている。

「関係」を切り口にする研究は多岐にわたるが、本誌では初めてこのテーマを取り上げたため、基本的概念及びそこから発展した論考を中心にした。「論説」では、冒頭の翟学偉氏に「中国人の人情と面子」について寄稿していただいた。氏の長きにわたる研究において、「関係」と並んで「人情」と「面子」についての研究も学界でよく知られている。日本語にも存在するこの二語であるが、「人情」には、例えば「送人情」(人情を贈る)、「欠人情」(人情の

借りを作る)などの慣用表現が物語るように、日本語の「人情」にはない用法があり、「関係」にまつわる「貸し借り」が含まれているのである。一方の「面子」は「メンツ」という中国語読みになっていることから察せられるように、中国人について語るときは専用表現になっている。が、それらは果たしてどのように「関係」に機能しているのか、氏の研究に詳しい。加えて林萍萍氏の面子の共有についての日中大学生の比較研究も参照されたい。翟氏とは視点や手法こそ違えど、われわれはそれぞれマクロとミクロの視座からのアプローチを同時に見ることができよう。

人間関係の構成は、自己を取り巻く関係の親疎により「ウチ」「ソト」「ヨソ」と幾つかの層になっている。その図式は、筆者の研究分野を持ちだして恐縮であるが、言語コミュニケーションにおいて、対人関係の言語行動についての研究によく用いられる。そしてこれは行動心理学においても重要な概念になっている。中国語には、それに相当する「自己人」「認識人/熟人」「陌生人」があるが、それぞれの意味するところは、それぞれの社会的文脈により異なることは言うまでもない。楊宜音論説では、社会心理学者の視点からこれまでの研究成果を幅広く辿りながら、氏自身の研究も踏まえ、西洋社会心理学の「自己」「集団」の概念では解釈困難な「自己人」を分析している。

人間関係において最も生得的で長期的であるものは、何

といっても血縁関係になる。中国人にとつての「関係」はそもそも血縁関係から押し広げられていくものであるとする指摘をよく目にする。その重要さは発達した親族名称やその呼称としての汎用からもうかがい知ることができよう。言うまでもなく、その根源には儒家の思想とそこから受け継がれた父系家族の家父長制度があるが、一方、現代中国社会にあつて、始まってから三十数年を数える一人っ子政策の実施や経済活動の活発化に伴つた労働人口の流動により、核家族が進んでいる昨今では、その伝統的な家族観が大きく変貌している。李霞氏の論説では、女性の「実家」・「婚家」の狭間にある生活実践を、華北農村部の実地調査を通して記述し、親族関係の日常的な営みの一端を示している。そこからわれわれは伝統的なもの、変わらないもの、そして変わりつつあるものをうかがい知ることができる。一方、血縁関係ほどではないものの、相対的所得的で恒常性をもつ関係に「地縁」を挙げることができる。翟氏が指摘した「面子」と「人情」が最も幅を利かせる社会的ネットワークであるが、張筱平論説ではその長い中国語教育の経験からコミュニケーションの場面における地縁のポジティブな働きを述べている。もっとも、「地縁」とは、すでにその社会的ネットワークから離れた者に関わる用語になっているため、その者同士をつなげるニュアンスを有することは言うまでもない。

一方、人間関係のネットワークに大きな変革を与えたのが、情報革命がもたらしたインターネットの普及である。「関係」は時空を超えてつながり、多層的且つ多重的に広がっていく。Wechat（中国版LINEといえるソーシャルメディア）では人々は幾つもの「群」（グループ）や「朋友圈」（友達グループ）に置かれ、おびただしい数の人とつながっていく。文明の発展はプロセスを踏んで徐々に浸透していくものだと世界近代文明発展の歴史が教えてくれるが、中国はいささか異なる。固定電話の普及を待たずに普及した携帯電話、そしてそれに伴い瞬く間に普及を遂げた「支付宝」（PayPal）もクレジットカードを待たずして、中国人の消費スタイルを大きく変貌させている。その利器の恩恵に与つて人は新たな関係のつながりとあり方を求める。周星論説では、携帯電話の普及状況を追いながらその人間関係に与える影響の現状を論じている。

また、本特集では少し異色に映るかもしれないが、中国の外交面においても、属人的な「関係」が機能している。指摘する上村氏の投稿論文や言語研究の第一線で活躍している井上氏の「直接的表現」と「間接的表現」にまつわる日中対照研究も掲載している。そして「天南地北」の楊曉捷氏のエッセイも、中国、日本、カナダを熟知する氏にして持ち得るセンスゆえ興味深い。

中国人の行動原理を見るうえで、「関係」研究は古き新

しき言わば永遠のテーマと言っても過言ではないだろう。本特集を通して何が見えるだろうか。見え方が人によって異なるかもしれないが、きつと何かが見えてくるに違いはない。本特集が中国人を理解するための見方の一つでも提示できれば幸いである。

*『差序格局』という用語には西澤治彦氏の「差序的な構造配置」という訳語があるが、ここではあえて「格差と序列の構造」とした。なお、本誌所収の翻訳論説によつては、西澤氏の訳を用いたものもある（費孝通著、西澤治彦訳『郷土中国』風響社、二〇一九年）。

（薛鳴）